

編集体制を一新しました

情報誌 CEL は 104 号より、編集体制を一新し再リニューアルをいたしました。各号ごとにテーマを設定する「特集」と CEL 所員の研究報告である「CEL OUTPUT」を中心に誌面を構成する方針は維持しつつ、特集の取り上げ方や全体のデザインを見直し、より幅広い方々に読んでいただけるように工夫していきたいと考えています。

なお、本誌で 15 回にわたり連載してまいりました「食卓の喜び」は前号 103 号をもちまして終了いたしました。バックナンバーはエネルギー・文化研究所の WEB サイトで検索可能ですのでご覧ください。

都市魅力研究室を開設しました

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所は 5 月 9 日、JR 大阪駅前南のグランフロント大阪「ナレッジキャピタル」内に「都市魅力研究室」を開設しました。同研究室では、都市の持つ歴史や文化、生活者や社会に提供する時間的・空間的価値、さまざまな人や価値観を交流させる力などを「都市魅力」として広く捉え、セミナーや講演・イベントなどを行っていく予定です。

詳細は大阪ガス(株)WEB サイトをご覧ください(プレスリリース・生活情報『都市魅力研究室』の開設について)。

今後の具体的な活動内容に関してはエネルギー・文化研究所の WEB サイトで適宜、情報発信してまいります。

On & On

大阪ガス(株)
エネルギー・
文化研究所 所長

木全 吉彦

Kimata Yoshihiko

昔、上司によく連れて行ってもらったバーの名は deuxième clé (ドゥージェーム・クレ) と言いました。フランス語で「二つ目の鍵」という意味ですが、まさにアサダさんの言う家と職場の中間にある「サードブレイス」へ入る鍵だったわけです。

本号の特集は「余暇から本暇へ」。言うまでもなく“本暇”は造語ですが、「余暇」は決して仕事などの義務的・公的な時間を引いた後の「余った時間」ではなく、それ自身、固有の役割と価値を持ったもうひとつの「本来の」時間であるべきではないかという仮説から企画が始まりました。

仕事とプライベートな生活をどのように調和させるかについては、近年、「ワーク・ライフバランス」の問題としてよく取り上げられます。そこではワークとライフを対立的に扱い、放っておくと肥大化し、か弱いプライベートな生活時間を蚕食しがちな(いわば悪者の)ワークをいかに制御するか、という文脈で語られることが多いのですが、考えてみればワークもライフの一部であり、「バランスを取る」類のものではないはずです。

人が自身の人生を振り返ったとき、まず思い浮かぶのが日々の家庭生活より仕事で取り組んだこと、達成したことであるというのは決して珍しくないでしょう。両者は決して対立概念ではなく、それぞれをそれぞれのものとして充実させるべきであり、そのための努力が必要なのではないでしょうか。

仕事時間を ON、余暇時間を OFF とする表現が日本でも広まりつつありますが、OFF については 1 日・1 週間単位での ON-OFF サイクル以外に、長期休暇という OFF や、定年・子離れ後の長い OFF もあります。これらをイメージすれば、OFF は決して停止・消灯ではなく、「ON とは別のスイッチが入る」ことと考えるのは容易でしょう。OFF すなわちもうひとつの ON の時間をいかに充実させるかを真剣に考え、具体的行動に移すことで、ワークも含めたライフ全体の質を向上させることができるのではないのでしょうか。

遊ぶように(クリエイティブに)仕事をし、仕事をするように(まじめに)遊ぶことができたなら素敵ではありませんか。